

第十講 異邦人の罪（一） 第一章十八—三三節の研究（三月廿日）

パウロは一章劈頭に於て先づ挨拶を兼ねて自己紹介をなし、次ぎに八節—十五節に於て感謝を以て始めて羅馬訪問の計畫について語り、十六、十七節に入りては自から羅馬書の主題に移りゆきて偉大なる語に包みて偉大なる思想を掲出した、挨拶を終へ感謝を終へ問題の提出を終へて茲に此大書翰は其序言を終つたのである、されば一章十八節より愈々本論に入るのである、即ち我等の用ひ來りし比喻によれば本館第一に入るのである。

然らば此大書翰の本論に於て先づ我等の會する語は何ぞ、人間救拯の福音を盛れる第一本館に於て先づ我等の眼を打つものは何ぞ、そは神の恩恵を傳ふる野の百合^{ゆかり}花の如き語か、否な神^{△△△△△△△△△△△△△△△△}の怒りを傳うる火の如き語である、それ神の怒りは、不義をもて眞理を抑ふる人々の凡ての不虔不義に向ひて天より顯はる。

と十八節は云ふ、誠に之吾人の意表に出づることである、併し乍ら福音は先づ罪惡の指摘を以て始まる、罪の摘示あり而して罪の悔改ありし後ならでは救拯の與へらるゝ素地がない、輝く如き福音の美屋は陰慘なる罪戾^{みちずち}指摘の土臺の上に立つ、美はしき花は黒き土より咲き出づる外はない、基督の福音の傳へらるゝに先ちて、「主の道を備へ其路線を直く」すべくバプテスマのヨハネの罪惡詰責がなくてはならなかつた、罪を責めずして先づ恩恵を説くは土臺なきに家屋を建つることである、かゝる愚かなる工師の今や世に少からざるは歎ずべき事である、パウロは人を救ふ道を熟知して居る、その順序を誤るが如き事はしない、彼は恩恵を説く豫備として茲に其鋭烈なるペンを揮つて、物すごき罪惡指摘に入るのである。

十八節最初の語「それ」は實は「そは」と譯すべきものである、即ち十八節は十七節の理由として述べられた形になつて居る、けだし救の必要なる理由は神の怒が人の上に臨みつゝあるからであると云ふ意であらう。

「神の怒り」の一句に接して之を厭はしき語となす人があるであらう、併しそれは「怒」の一字を以て人間の怒を想起したからのことである、人の怒は多くの場合に於て感情の亂れを意味する厭はしき語である、しかし神の怒の状態が人のそれと違ふことは云ふまでもない、そして神怒の表顯は事實として此世に臨むことを我等は認むる、これ理論にあらず眞に事實の問題である。「不義をもて眞理を抑ふる人々」は即ち謂ゆる罪人である、善を善と知り之を行はざるべからずと知り乍ら敢て之を抑止して不義に歩む者である、神の神たる事を知りながら心の中に實驗せらるゝ此眞理を阻みて其發動を抑ふる者である、換言すれば眞理を眞理として知りながら之に従はず、不義を不義と知りつゝ之に従ふ者、これ即ち罪人である、罪人自身は此事をみとめないであらう、しかし罪より救はれて神に生くるに至りし人は自己の過去を顧みて一様に認知するのである。

かゝる人の凡ての不度（神に對して背く事）と不義（人に對して道德的に義ならざる事）とに向つて「神の怒りは……天より顯はる」るのである、恰も子の不義に對しては父は怒らざるを得ざるが如きものである、「顯はる」の原語 *apokalyptetai*（アポカルプテタイ）は、英語 *is revealed* に當り現在動詞である、故に今既に神怒が顯はれつゝあるを意味する、然らば何を以て神怒の現れとなすか、此問題について學者は種々の意見を提出する、併し其中最も合理的なるものは二十四節以下に描かるゝ荒濫の状態其者が即ち神怒の發表であるとなす見方である、然る時は十八節の總括的斷定を十九節以下が解明した事になるのである。

此十八節は異邦人のみを指したか又は人類全體を指したかは學者の間に議論のある所である、もし異邦人のみを指したとすれば此節は第二章に全然關係なきものとなりて、たゞ一章十九節以下の異邦人の罪惡指摘の序言にのみ止まるのである、もし又此節が人類全體を指したとすれば、パウロは先づ人類の全部を見渡して此總括的斷定を下し、然る後人類を異邦人とユダヤ人とに二分して、先づ一章十九節以下に於て異邦人の罪を指摘し、次ぎに第二章に於てユダヤ人の罪を指摘したことになるのである、即ち一章十八節は一章十九節―三章二十節の序言となるのである、後の見方は頗る組織的に見えるので近代の聖書學者たるサンデーの如きは之を採用してゐる、しかし「不義を以て眞理を抑ふる」と云ふ心理は全然異邦人式であると云ふ理由を以て前の見方を採る人にペンゲル、マイヤー、ゴオデー、ビート等の大家がある事に注意せねばならぬ、もし此方の見方を正しとせば、十八節は全然異邦人に關する語となるのである（ゴオデー羅馬書註解英譯百六十八頁に於ける明晰なる分解を見よ）。

一章十九節―三二節は三段に分ちて見るを便とする、第一段は十九節―二三節である、茲に異邦人の偶像崇拜の心理は頗る的確に擧示せられたのである。

(19) そは人の知るべき所の神の事柄は人に明かにして既に神これを人に顯はし給へばなり、(20) それ人の見ることを得ざる神の限なき力と其神性とは造られたる物により創世よのけはじめより此來このかた悟り得て明かに見るべし、是故に人々言ひ逃るべきやうなし、(21) 既に神を知りて尚ほを神と崇めず亦謝することをせず却て其思念おもひを亂し其愚なる心暗くなれり、(22) 自ら智さとし稱へて愚なる者となり、(23) 朽壞くわいざる神の榮光を變へて朽壞くわいすべき

人及び禽獸昆蟲「とりけものはうもの」の像かたちに似す。

「人の知るべき所の神の事柄」とは何を意味するか、之を原文のまゝに譯せば「神に關して人の知り得べき事」又は「神に關して人に知らるゝ事」となる、其の意味する所は何等特殊の天啓に依らずして自然と人に知らるゝ所の神的知識を指すのである、即ち唯一の神の存在すること、及び其神の大體の性質（例へば善を愛し惡を憎む事、又その限りなき力の所有者なる事等）は異邦人の間にありても極めて明かである、神は既に之を彼等に顯はし給ふたのである、神は彼等に人たるの本性を與へ、理性と良心とを與へ、且宇宙萬物てふ材料を供して、彼等に神的知識を得せしむる道を開き置き給ふたのである、殊に彼等の間の哲學者、宗教家、智者、識者等比較的優秀なる頭腦と感受性を有する者には、神に關する知識が或程度までは當然備はるべき筈である。

誠に然り、神には限りなき力（永遠に亘る力）がある、彼は偶像神の如き無力なるものではない、宇宙を支配し萬物を動かす永への力が彼に在る、そして彼には又明かに「神性」がある、彼はかの多神教の神々の如き卑俗なる性能の所有者ではない、眞に萬物の造主たる所の神たる性を具有してゐるのである、そして神に此力と此神性との備はれる事は宇宙萬物に明かに記されてゐる、虚心平氣にして——多神教的偏見を脱して——此宇宙萬物に對する時誰人か神の神たるを悟識しないであらうか、よし神の特殊の默示に接せざる異邦人と雖も一度その本性を開いて神の造化を見れば、彼等は宇宙唯一の神と其力とを知り得べき筈である。

然るに彼等異邦の民は「既に神を知りて尚これを神と崇めず亦謝することを」しない、彼等は心に與へられ居る眞理を我と自ら抑塞して、神を認めつゝ而も神を否認するのである、何者が彼等をして此矛盾に出でしむるか、

その動機は様々であらう、併し彼等が惡魔の囁きに聽従したる一事は明かである、かくて其思は亂れ其心は暗くなり、自ら智者を以て居るも實は愚者にして、朽ち果つべき人及び禽獸蟲魚の像を以て神を刻み偶像崇拜の低卑と醜怪とに墮して居る、これ實に彼等異邦人の實狀である、見よ、ギリシア、ロマの多神教を、彼等の神々は人の如き情慾、痴愚、放恣、復讐等に走るものである、これ「朽壞てざる神の榮光を變へて朽壞つべき人」となすものではないか、又見よ、エジプト、カルデヤの動物崇拜教を、牛、猫、蛇、鰐魚^{ワニ}等を拜する彼等は正に「神の榮光を變へて……禽獸昆蟲の像に似す」るものではないか、文化を以て誇る民が心靈問題における其愚昧は沙汰の限りである、而して心靈問題は人生の最根本なる問題である、源濁りて末清き筈はない、心靈に於て愚昧なる彼等は其凡てに於て愚昧なのである。

パウロは偶像崇拜の心的經過を右の如く描いた、近代の謂ゆる宗教學者と稱する輩は彼の此斷定を排拒するであらう、しかしパウロは深く人の心の内部に穿つたのである、そして心の奥深く存する靈魂の問題として之を見ただのである、然る時心靈の鏡に映りし神知的知識を我と自ら打ち消して、自己の欲望を彼に移して眺むる時に偶像拜跪は自から生起するものなる事を知るのである、パウロは罪に生れて罪に住む人間の心の傾向を眺めて、一神の知覺より偶像崇拜への墮落を其心の中の經過として認めたのである、實に大膽にして深刻なる斷案と云ふべきである。

神を知覺しつつ而も偶像に走るは

パウロは一章の冒頭で、まず挨拶を兼ねて自己紹介をしている。次に八節から十五節にかけて、感謝の言葉で始め、ローマ訪問の計画について語り、十六節と十七節に入って、自らローマ書の主題へと移り、偉大な言葉の中に偉大な思想を打ち出している。挨拶を終え、感謝を終え、問題の提起を終えて、この大書簡の序言はここで完了したのである。したがって、一章十八節からいよいよ本論に入る。これは、われわれが用いてきた比喻で言えば、本館の第一室に入ることになる。

それでは、この大書簡の本論において、まずわれわれが会合う言葉は何であろうか。人間救いの福音を納めた第一室で、まずわれわれの目に飛び込んてくるものは何であろうか。それは神の恵みを伝える野のゆりの花のような言葉であろうか。いや、神の怒りを伝える火のような言葉である。

というのは、不義によつて真理を阻んでいる人々のあらゆる不敬虔と不義に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。

と十八節ではこう述べている。これは、まことにわれわれの意表に出ることではあろう。しかしながら、福音はまず罪の指摘から始まる。罪の摘発があり、そして罪の悔い改めがあつてこそ、救いが与えられる土台ができる。輝くような福音の美しい家は、陰惨な罪の指摘という土台の上に建つのだ。美しい花は黒い土から咲き出るよりほかに道はない。キリストの福音を伝えるに先立つて、「主の道を備え、その通り道をまっすぐにする」べく、バ

ブテスマのヨハネによる罪の叱責がなくてはならなかった。罪を責めずに、まず恵みを説くのは、土台のない家に建物を建てることである。このような愚かな設計者が、今や世に少なくないのは嘆くべきことである。パウロは人を救う道を熟知している。彼はその順序を誤るようなことはしない。彼は恵みを説くための準備として、ここにその鋭いペンを振るい、すさまじい罪の指摘に入るのである。

十八節の冒頭の言葉「というのは」は、実は「そは」と訳すべきものであり、すなわち十八節は十七節の理由として述べられた形になっている。おそらく、救いが必要な理由は、神の怒りが人々に下りつつあるからだ、という意図であろう。

「神の怒り」という句に接して、これを嫌な言葉だと感じる人がいるかもしれない。しかしそれは、「怒り」の一字から人間の怒りを連想したからにほかならない。人の怒りは多くの場合、感情の乱れを意味する好ましくない言葉である。しかし、神の怒りの状態が人のそれと違うのは言うまでもない。そして、神の怒りの現れが事実としてこの世に臨んでいることをわれわれは認めねばならない。これは理論ではなく、真に事実の問題である。「不義をもって真理をはばんでいる人々」とは、いわゆる罪人のことである。善を善と知り、それを行うべきだと知りながら、あえてそれを抑えつけ、不義に歩む者たちである。神が神であることを知りながら、心の中に体験されているこの真理を遮り、その活動を抑える者たちである。言い換えれば、真理を真理として知りながらそれに従わず、不義を不義と知りつつそれに従う者、これこそが罪人である。罪人自身はこのことを認めないであろう。しかし、罪から救われて神に生きるに至った人は、自分の過去を振り返って、一様にその事実を認知する

のだ。

このような人々のあらゆる不敬虔（神に対して背くこと）と不義（人に対して道徳的に正しくないこと）に対して、「神の怒りが…天から啓示されている」のである。まるで、子の不義に対して父が怒らずにはいられないのと同じである。「啓示されている」の原語 *apokaluptai*（アポカルプタイ）は、英語の *is revealed* に相当する現在動詞である。したがって、今すでに神の怒りが現れつつあることを意味している。では、何を神の怒りの現れとするのか。この問題について学者はさまざまな意見を提出するが、その中で最も合理的なのは、二十四節以下に描かれている墮落の状態そのものが、すなわち神の怒りの発表であるとする見方である。そうすると、十八節の総括的な断定を十九節以下が解明したことになる。

この十八節が異邦人だけを指したのか、あるいは人類全体を指したのかは、学者の間で議論のあるところである。もし異邦人だけを指したとすれば、この節は二章とはまったく関係なく、ただ一章十九節以下の異邦人の罪の指摘の序言にとどまる。もしまた、この節が人類全体を指したとすれば、パウロはまず人類の全部を見渡してこの総括的な断定を下し、その後、人類を異邦人とユダヤ人に二分して、まず一章十九節以下で異邦人の罪を指摘し、次に二章でユダヤ人の罪を指摘したことになる。つまり、一章十八節は一章十九節から三章二十節までの序言となるのである。後の見方は非常に組織的に見えるので、近世の聖書学者であるサンデーのような人々はこれを採用している。しかし、「不義をもって真理をはばむ」という心理は、純粹に異邦人的であるという理由から、前の見方をとるベンゲル、マイヤー、ゴードー、ビートなどの大家がいるこ

ともにも注意しなければならない。もしこちら側の見方を正しいとすれば、十八節は完全に異邦人に関する言葉となる（ゴーデーの『ローマ書註解』英訳一六八頁における明晰な分析を参照されたい）。

一章十九節から三十二節までは、三段に分けて見るのが便利である。第一段は十九節から二十三節であり、個々に異邦人の偶像崇拜の心理が非常に的確に示されている。

(19) 神について知りうることは、彼らの間で明らかです。神が彼らに明らかにされたのです。(20) 神の、目に

見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はつきりと認められるので、彼らに弁解の余地はありません。(21) 彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむしろなくなり、その鈍い心は暗くなったのです。(22) 彼らは、自分た

ちは知者であると主張しながら愚かになり、(23) 朽ちない神の栄光を、朽ちる人間や、鳥、獣、這うものに似たかたちと替えてしまいました。

「神について知りうる事柄」とは何を意味するのか。これを原文のままに訳せば「神に関して人の知り得る事柄」または「神に関して人に知られる事柄」となる。その意味するところは、いかなる特殊な啓示によらずとも、自然と人に知られる神的な知識を指している。すなわち、唯一の神が存在すること、およびその神の大体の性質（例えば、善を愛し悪を憎むこと、またその限らない力を持つことなど）は、異邦人の間でも極めて明らかである。神はすでにこれを彼らに明らかにされたのである。神は彼らに人としての本性を与え、理性と良心を与え、かつ宇宙万物という材料を提供して、彼らに神的な知識を得させる道を開いてくださったのである。特に、彼らの間

の哲学者、宗教家、知者、識者など、比較的優秀な頭脳と感受性を持つ者には、神に関する知識が、ある程度までは当然備わるべきはずである。

まことにそうである。神には限らない力（永遠にわたる力）がある。彼は偶像神のような無力なものではない。宇宙を支配し万物を動かす永遠の力がある。そして彼にはまた明らかに神性がある。彼は、あの多神教の神々のような卑俗な性質の所有者ではない。真に万物の創造主たる神としての性質を具えているのである。そして、神にこの力とこの神性が備わっていることは、宇宙万物に明らかに記されている。虚心平気になって——多神教的な偏見を脱して——この宇宙万物に対するとき、誰が神が神であることを悟らないであろうか。たとえ神の特別な啓示に接しない異邦人であっても、ひとたびその本性を開いて神の創造の業を見るならば、彼らは宇宙唯一の神と、その力を知り得るはずである。

しかしながら、彼ら異邦の民は「神を知っていながら、神を神としてあがめることも感謝も」しなかったのである。彼らは心に与えられている真理を自ら抑え込み、神を認めつつも神を否認するのである。何が彼らをこの矛盾に陥らせるのか。その動機は様々であるうが、彼らが悪魔のささやきに従ったことは明らかである。こうしてその思いはむなしくなり、その心は暗くなり、自分では知者であると思っけていても、実は愚か者で、朽ち果てる人間や鳥、獣、はうものの像をもつて神を刻み、偶像崇拜という低俗で醜惡なものへと墮落してしまっている。これこそ、彼ら異邦人の実情である。見よ、ギリシャ、ローマの多神教を。彼らの神々は、人のような情欲、痴愚、放縱、復讐などに走るものである。これは「朽ちることのない神の栄光を、朽ちる人間」と交換するもので

はないか。また見よ、エジプト、カルデヤの動物崇拜を。牛、猫、蛇、ワニなどを拝む彼らは、まさに「神の栄光を、……鳥、獸、這うものに似たかたちと替えて」いるのではないか。文化を誇る民が、靈的な問題におけるその愚昧さは、言い尽くせないほどである。そして、靈的な問題は人生の最も根本的な問題である。源が濁っていて末が清いわけがない。心霊において愚昧である彼らは、そのすべてにおいて愚昧なのである。パウロは偶像崇拜の心理的な経過をこのように描いた。近現代のいわゆる宗教学者と称する輩は、彼のこの断定を排斥するであろう。しかし、パウロは深く人の心の内部を掘り下げたのである。そして、心の奥深く存在する魂の問題としてこれを見たのである。そうするとき、心霊の鏡に映った神的な知識を自ら打ち消し、自己の欲望をそれに移して眺めるときに、偶像礼拝は自ずと生起するものであることを知るのだ。パウロは、罪に生まれて罪に住む人間の心の傾向を観察し、一神の知覚から偶像崇拜への墮落を、その心の中の経過として認めたのである。まことに大胆にして深刻な断案であると言えるよう。

神を知覚しながら偶像に走るのは悟性の乱れである。悟性の乱れの次に起くるのは情性の乱れである。すなわち、彼らが真の神を退けて偶像を信じるに至ったため、情性の荒廃は当然の結果として起こったのである。これを記述するのが二十四節から二十七節である。これが第二段である。まず二十四節は、こう述べている。

そこで神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡されました。そのため、彼らは互いに自分たちのからだを辱めています。

「そこで」という言葉にわれわれは注意しなければならない。前節で偶像崇拜を描き、今これを受けて「そこ

で」と言う。したがって、二十四節は偶像崇拜の結果として情性の汚れに陥ったことを意味しているのである。そして、「神は、彼らを……汚れに引き渡され」とあるのを見ると、この節は神の怒りの現れとしてこのことを記したものであることは明らかである。

「引き渡され」の原語は *paredōken* (パレドークエン) は、二十六節の「引き渡された」もこの字を用いている。英語の聖書はこれを *gave up* と訳している。引き渡してしまったということである。彼らが偶像礼拝の結果、道徳的な頹廢に陥ったのを、神はあえて阻止したり警戒の手を加えたりせず、そのままに放任してしまわれたのである。彼らが肉欲という船に乗って汚れた海を走りつつあるのを、そのなすがままに任せてくださったのである。こうして彼らは、滅亡に向かって急走するよりほかに道がなくなつたのである。彼らの罪の激しさが、ついにこの結果を生んだのである。これこそが神の怒りの現れである。

そもそも偶像崇拜には必ず道徳的な腐敗が伴う。パウロがローマ書を起草した当時滞在していたコリントの有名な場所は、偶像崇拜が盛んであったと同時に、その道徳的な頹廢で悪名高いところであった。一方では哲学者が非常に高尚な教えを説きつつあり、人々は争ってその講義の席に列したにもかかわらず、この講義に列する人自身が乱倫の巷をさまよい、あえて恥じないという有様であった。まことに、偶像崇拜に道徳的な腐敗が付随するのは、甲の結果として乙が起る実証である。日本においてもその実例は決して少なくない。仏教そのものは尊い教えに違いないが、これには偶像的な信仰が伴いやすく、そして偶像的な信仰の起るところでは必ず風紀の頹廢が生じるのである。さらに進んで二十六節と二十七節を見ると、そこには人間性の逆用という醜惡な罪が

挙げられている。聖書にこのような言葉があることを異とする人がいるかもしれないが、パウロは偶像崇拜の結果たる情性の荒廃を述べようとするには、当時盛んに行われていたこの種の罪を指摘せざるを得ないに至ったのである。ギリシアやローマの社会でこの種の腐敗が甚だしかったことは、古記録の明記するところである。しかしながら、わが国であってもまた、この点において決して清いものではない。実に、偶像崇拜は人間の悟性の乱れであると同時に、情性の乱れをも引き起こす恐るべきものである。

悟性が乱れ、情性が乱れて、意志もまた乱れざるを得ない。二十八節以下に記されているさまざまな不義は、いずれもみな人が人に対して犯す罪であって、すなわち意志の荒廃を意味するものである。

ローマ書一章十八節から三十二節は、異邦人の罪の摘発である。そして、心霊の鏡に映った一神の姿を打ち消して多神を崇拜するに至った偶像崇拜を、あらゆる罪と不義の根源と見ているのがその特徴である。パウロは学者のように細かい論証に頼って論理の筆を進めるのではなく、預言者のように、神の人として確信の言葉を力強く吐露している。したがって、侵しがい権威がその全体を貫いていることを否定することはできない。実に偉大な思想であり、偉大な論述である。しかしながら、彼のこの権威を認めない者は、必ず彼の所論に抗議を提出することであろう。だがパウロは断固としてそれらの抗議を排し去り、あくまでその確信を固執するのである。

パウロがここで言っていることは、すなわち聖書全体の教えるところである。偶像崇拜があらゆる不義と腐敗の原因であるというのは、すべての旧約の預言者が異口同音に唱えるところであって、新約に入ってもまたこのことはその各所で強調されているのである。あがめるべき方をあがめずに、あがめるべきではないものをあがめ

るのは、心霊の病的な状態である。心霊がすでに病んでいれば、その人のすべてが病むよりほかに道はない。こうしてさまざまな不義や汚れた行いは、起こらないようにしようとしてもできないのである。そして偶像とは、すべて神以外のあがめられるものを指す。利欲、権勢、虚名などもまた偶像の一種である。すべて神以外のものに頼るは偶像崇拜であり、そしてあらゆる不義と汚濁の源泉である。人類数千年の歴史は、明らかにこのことを証明しているのだ。そして、人類の歴史において常に社会を支え、清め、保つ力となってきたのは、聖なる唯一神の信仰である。まことに、キリストの福音こそ、人類を慰め、励まし、改めつつきたものではないか。これは確かに、過去二千年間の人類史に太字で記される一大事実である。これを科学者、哲学者、詩人、政治家などの各方面の人々について見ても、神を知る人の方が、神を知らない人よりも多くの感化を他に与えたことは、否認しがたい事実である。したがってわれわれは言う。人類幾千年の経験は、明らかにパウロの言葉を裏書きするものであると。

以上のようにパウロの罪の指摘を眺めるとき、われわれもまたこの罪人の一人であるとの実感が湧き起こることを免れない。今や幸いにして神を神として認めるに至ったとしても、神を認めなかった当時に犯したさまざまな罪は、思い出すだけでも恐ろしい。そして今や神に立ち返るに至ったとしても、なお完全に聖い人となることはできず、罪はまだすべてを去ったと言ふことはできない。ああ、罪よ、罪よ、お前はかくも私の生涯を悩ます残酷な暴君であるのか。私はこの残酷な暴君の奴隷として一生を束縛の中で送らなければならないのであるか……。罪の指摘に遭って、苦悶はひとしお高まるのである。しかしながら、預言者イザヤはこう言う。

さあ、来たれ。論じ合おう。――主は言われる――たとえ、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとえ、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。(イザヤ書一章十八節)

まことに慰め深い預言ではないか。緋のような罪も消えて雪のように白くなり、紅のような罪も去って羊の毛のように純白になると言う。罪人にとってこれ以上ない大きな喜びの予告である。そして、主イエスの福音こそ、実にこの預言を達成するものである。彼は十字架においてすべての人々の罪を負い、そのためにわれわれの罪はいかに重く深くても、春の日の淡雪のように消え去るのである。そしてわれわれは、罪をその根底において除かれ、ただイエスを信じるだけで「功績によらず義とされる」のである。罪があるのに罪なしとされ、義でないのに義とされる。まことに至大の恵みであると言えるのではないか。しかも、まだ雪のように、羊の毛のように白くなったのではない。ここにまだ不満がある。ゆえに希望がある(満ちてしまえば希望はない)。キリストが来られて、われわれが復活し栄光を受けるとき――その時われわれは、完全に純白の衣をまとい、手には勝利の印である棕櫚の葉を持って、御座と子羊の前に立つに至るのである(ヨハネの黙示録七章九節)。その時は、預言者の預言が完全に成就する時、福音はその目的を達した時である。その時、救いは完成し、神の義と人の義とが相一致するのである。これは罪が事実に痕跡もなく失せ、義のみがすべてに満ちあふれる時である。然り、ただ義のみがすべてに満ちあふれる時である。

パウロはこれを知っているがゆえに、またこれを説くための準備として、まず罪の指摘にその強いペンを振ったのである。彼が罪を責める様は、実に峻烈を極めているように見える。しかしこれに添えて、赦しの道を必

ず提示するのだ。そして、人は誰であっても、まず赦しの実感を味わうことはできない。まず罪がますます増すのを実感して、耐えがたい苦痛を心に得た後、ついに福音による赦しを受け入れて、心に平安を味わうに至るのである。これは自然で、かつ健全な順序である。ゆえに、最初の苦悶は決して恐れるに足りない。これはやがて後の歓喜を生むべき第一歩である。ゆえにパウロは、あえてためらわず、ちゅうちよせず、まず激しく異邦のあらゆる人々の罪を指摘し、かつ詰問したのである。パウロのこの心を知るとは、ローマ書の一章後半、二章全部、三章前半を読む上で非常に大切である。